

〔原著〕 松本歯学 11 : 103~110, 1985

key words : 日本歯科医学史 — 明治時代 — 開業医

## 明治時代の一開業医についての考察 渡辺晋三先生遺品より

矢ヶ崎 康

松本歯科大学 歯科医学史研究室

市川博保

東京都

橋口緯徳

松本歯科大学 陶材センター

A Consideration about a Dentist in the Meiji Era  
from the Records of Dr. Shinzo Watanabe

YASUSHI YAGASAKI

*Dental and Medical History, Matsumoto Dental College*  
(Chief : Prof. Y. Yagasaki)

HIROYASU ICHIKAWA

Tokyo

HIROYOSHI HASHIGUCHI

*Porcelain Center, Matsumoto Dental College*  
(Dr. H. Hashiguchi)

### Summary

Through Dr. Shinzo Watanabe who was a pioneer in dentistry, I would like to analyse the records of examinations in his posthumous works to seek an image of dentists in the Meiji Era.

Since there were no insurance systems in those days, every medical examination was a general examination—meaning that patients had to be examined without insurance.

However Dr. Watanabe set up rough standards to help every patient pay the fee for a medical examination equally and at the same rate.

As for the conditions of practice, 432 patients were examined in the first year alone from which he earned 1413 yen as his income. His income increased year by year so that after 15 years it had increased 8.5 times his starting salary.

That was partly because the number of dentists was not so large compared with today, and the same thing can be said for the number of decayed teeth. In addition, it seems that Dr. Watanabe was very popular among his patients.

It is interesting that in his documents he had less patients in February and December, and that he could earn much more money when fewer patients came. It seems the same way for today's dentists.

### は し が き

日本の近代歯科医学は万延元年（1860）米国歯科医ウィリアム・クラーク・イーストレイキ William Clark Eastlake が来日し、歯科医術をもたらした時から始まり、その後 Eastlake に師事して長期にわたり海外で修業した長谷川侯兵衛はじめ明治15年（1882）までに数年間在日した外国人医師に師事した者、自ら外国へ留学し歯学を修得帰国した先覚者らの努力によってその基礎が築かれた。その先駆者の一人に渡辺晋三<sup>ミマサカ</sup>がいた（写真1）。晋三は弘化元年7月7日美作勝山<sup>マサマ</sup>国（現在の岡山県）に生まれ、父は勝山藩の家老渡辺「政」で、母は同藩ご典医山口良三の子女「栄子」であっ

た。慶応3年（1867）藩の命で江戸に遊学、江戸で勉強を終えた後、勝山に帰郷して藩校の助教となる。廃藩の後再び東京に出て、司馬達湖<sup>シバタツコ</sup>について漢学を究め、明治11年横浜に出て米国人歯科医ハラック・マーソン・パーキンス H. Mason Perkins の門に入り歯科を学んだ。同12年歯科医術開業試験に合格し、同13年4月に京都で開業した。妻元子との間に1男2女があり長男「済」は東歯専を終え父の後継者となる。

近時に至り、はからずも渡辺家の申し出により本学にその遺品の寄贈があった。その資料をもとにして、当時における歯科の実状の一部分を調査する事が出来得たのでここに報告する。



写真1：渡辺晋三氏

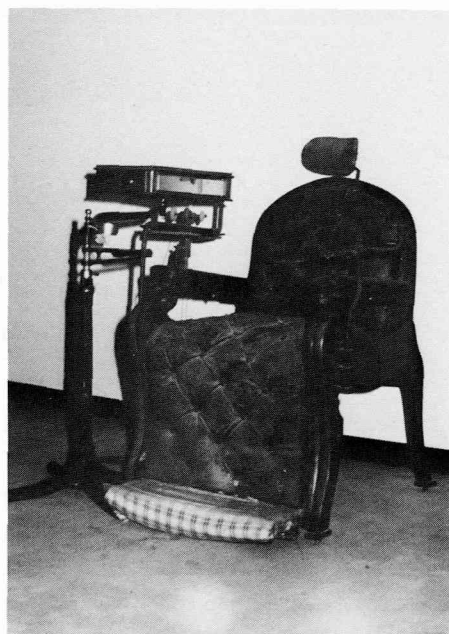


写真2：治療椅子

## 資料並びに調査方法

寄贈された資料は、治療椅子、足踏みレーズ(写真2)、名簿(明治14～28年)19冊、治療簿(写真3、明治16～28年の間、明治19、20年資料なし)18冊、収納録(写真4、明治13、17、18、20年)5冊の計42冊と(表1)、当時の本、論語他計139冊である(表2、3)。

方法は① 明治16年から明治28年までの患者名簿録から、月別来院患者数を出し、年度別患者総数と月別患者総数を出し、月別来院患者平均を出しその推移を見た。次いで患者年延人員と月平均患者数の推移を比較してみた。

② 次に治療簿から、記載があった開業当時の月別平均収入と月平均延患者数を出し、当時の治療費をひろいあげてみた。

## 調査成績

① 年度別患者数は開業当初の明治13年は月18人～48人の間にあり年間432人、月平均で36人であったが、明治16年には月の来院患者数は104人～172人の間にあり患者総数1680人と4倍となり、明治21年には月の来院患者数は204人～298人の間にあり患者年間総数3128人であった。明治27年には患者数は212人～409人の間にあり、年間延患者数3679人に達し開業時の8.5倍、明治16年より約

表1：診療録資料の内訳

名 簿	明治 14 ～ 28 年	19 冊
治 療 簿	明治 16 ～ 28 年	18 冊
収 納 録	明治 13, 17, 18, 20 年	5 冊
合 計		42 冊



写真3：治療簿

2.2倍と増加を示している。

② 次に明治16年から明治28年の月別延患者数は2301人(2月)～3359人(5月)の間にあり、月平均患者数は209人～305人の間にあり、最高は5月305人、最低は2月209人であった(表4、図1)。

③ 明治16年から明治28年までの年別延患者数は、明治16年の1680人から年々増加の一途をたどり、24年に一時前年比181人の減少をみたが、26年に最高の3703人に達した(図2)。

④ 明治時代の治療代は、治療費15銭～30銭、止痛料15銭～20銭、抜歯料10銭～60銭平均30銭、根充填50銭、ゴム充填20銭、銀充填70銭～1円50銭、金充填3円、掃除料1円、義歯6円～18円、菓子料30銭～50銭であった(表5)。

参考のため明治の末期から昭和の初めにかけての歯科治療代を表6、写真5、写真6に示す。

## 考 案

我国の歯科医術は江戸時代を通じて歯抜、入歯師として教養の低い香具師やそれに類する人々によって、営まれていたという事実が、わが国の歯科医学史に語られている。わが国の本来的歯科医学は、幕末から明治初期にかけて来日した数名の外国人や、あるいは外国に留学して修業してきた幾人かの邦人の手によって発展の初期を築いてきた。その中の一人に高山紀斉がおり、アメリカ留学の後、高山歯科医学院を1890(明治23)年に設立し(現在の東京歯科大学の前身)、1875(明治8)年には小幡英之助が東京医学校で我が国初の歯科医師試験に合格し、同年10月免許を下附される。その後歯科医師は漸増し、医事法制としては他医

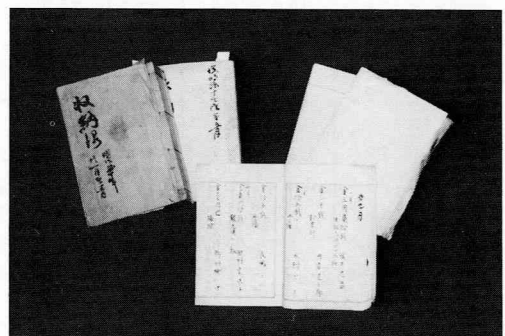


写真4：収納録

表2：渡辺晋三先生蔵書寄贈一覧（1）

1. 御江戸絵図	18. 和漢名数目録	35. 狂詩選	52. 錦繡段
2. ト筮早考	19. 唐詩選	36. 字典節用集	53. 新板五經
3. 輿地史略抄解	20. 詩語碎錦	37. 書經 天	54. 易經 乾
4. 受取諸券	21. 狂詩謄志題	38. 書經 地	55. 易經 坤
5. 名盡	22. 開卷百笑	39. 天民遺言	56. 春秋
6. 袖珍名乗字引	23. 明倫撮要	40. 聯珠詩格	57. 孟子 卷之十一
7. 内科闡微	24. 葬祭略式	41. 日本外史字引	58. 論語 二
8. 懷中寶記	25. 采風集 初編	42. 詩工錐鑿	59. 論語 三
9. 重訂五經字引大成	26. 禮 元	43. 史畧	60. 詩礎階梯
10. 名判集成	27. 禮記 貞	44. 宋三大家絕句	61. 等法指南車
11. 釈迦如来一代記	28. 禮記 亨	45. 皇道要畧	62. 鴨東四時雜詞
12. 修身論	29. 禮記 利	46. 歌神考	63. 蒙求俚諺補關鈔
13. 孝經釋義便蒙	30. 中庸 後藤點	47. 詩經 上	64. 陽寶慶劫記
14. 古文孝經正文	31. 中庸 道春點	48. 詩經 下	65. 大學
15. 習字学	32. 神道童子傳卷三	49. 日本外史字引	66. 地球儀用法
16. 諸韻瑚璉	33. 今日鈔	50. 孟子 卷之三	67. 商賈往来
17. 蠶飼の栞	34. 啓蒙知恵乃環	51. 孟子 卷之七	68. 庭訓往来

表3：渡辺晋三先生蔵書寄贈一覧（2）

69. 醫方大成論	86. 三體文淵遺珠	103. 竹山東征稿	120. 鎮臺日誌
70. 茶山翁筆	87. 文章軌範字引	104. 虎之巻	121. 容舍漫吟
71. 中庸章句	88. 四聲字林	105. 禁厭之詞並次第	122. 蘭洲先生墓表
72. 和漢弄法	89. 和漢書畫一覽	106. 鳩巢猷可録	123. 文通
73. 官職通解	90. 三字經	107. 岡山県御布達	124. 履軒先生文抄
74. 藩銘録	91. 人相小鑑大全	108. 草稿	125. 服忌令
75. 増字文選字引	92. 詩林良材坤之上	109. 課程復文稿	126. 左設私抄
76. 文章早引	93. 詩語碎錦	110. 記事	黄備阪谷素撰
77. 讀史訓蒙初篇	94. 諸御役目録	111. 司謁直日録	127. 左設私抄
78. 漢語字類	95. 反切三重正俗	112. 記事	黄備阪谷素子絢撰
79. 漢和初心抄	96. 詩礎階梯	113. 一刀流兵法	128. 国立銀行増額
80. 唐詩礎	97. 書翰便蒙	114. 箕陵集抄	募集概畧
81. 嘉永五百題	98. 合類鍼灸拔萃	115. 炎窓代睡	129. 山陽各小学校
82. 天津祝詞	99. 俳諧板葉集	116. 切腹介借法令口決	秀才詩文集
83. 譯書字解	100. 早引節用集	117. 通味	130. 御大禮御用掛
84. 東海道中詩	101. 相法類編	118. 蕉園先生文抄	御役人附
85. 通詩選諺解	102. 悉皆字彙	119. 蕉園先生詩鈔	131. 日光山諸所案内手草

表4：明治時代一開業医の月別延患者数

明治 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
16	104	123	128	132	173	150	172	142	142	148	134	132
17	117	141	149	154	188	152	190	243	230	205	163	180
18	194	204	221	201	290	234	232	228	215	207	162	158
19												
20	195	192	256	127	298	265	255	274	236	235	188	204
21	232	226	252	204	321	297	298	268	252	270	255	253
22												
23	280	218	278	300	308	293	285	277	275	238	245	258
24	214	175	243	296	326	315	297	260	265	271	207	205
25	254	260	305	271	351	294	344	367	297	268	268	237
26	299	234	338	334	340	362	330	298	318	306	292	252
27	235	212	314	353	409	383	318	314	246	295	305	295
28	336	316	348	367	355						183	240
合計	2460	2301	2832	2739	3359	2745	2721	2671	2476	2443	2402	2414
平均	224	209	257	249	305	275	272	267	248	244	218	219

科と並んで口中科が認められ、1879（明治12）年の医術試験規則で歯科が正式に認められ列記されることになった。1883（明治16）年、医術開業試

験規則では歯科試験科目が定められた。

渡辺晋三が、前述の如くパーキンスの門に入るのは、1878（明治11）年の事であった。時に晋

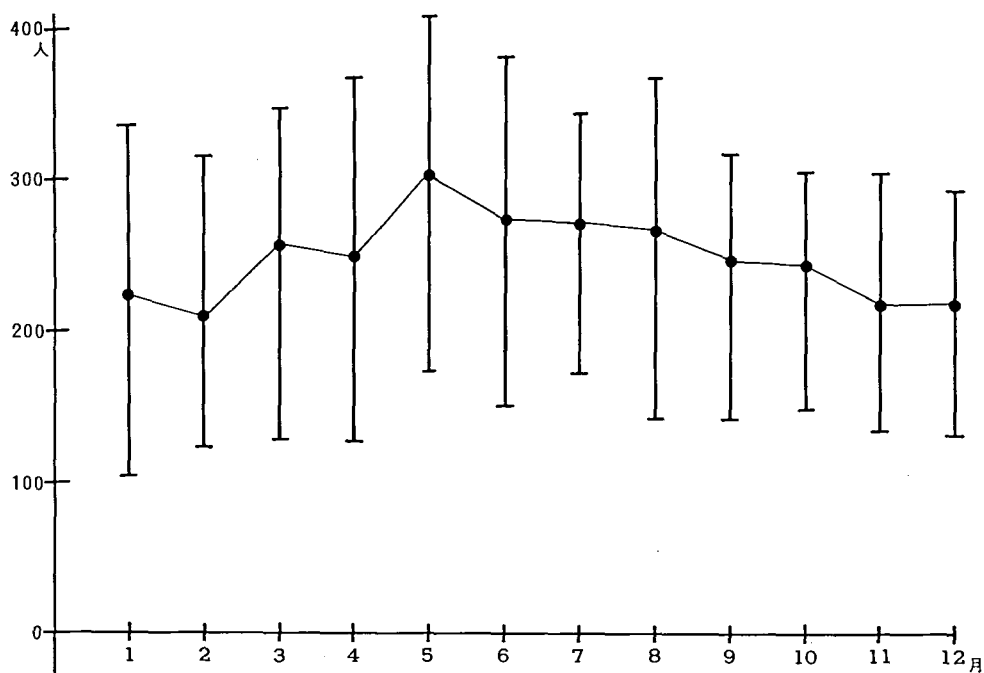


図1：明治時代一開業医の月別平均患者数（明治16～28年）

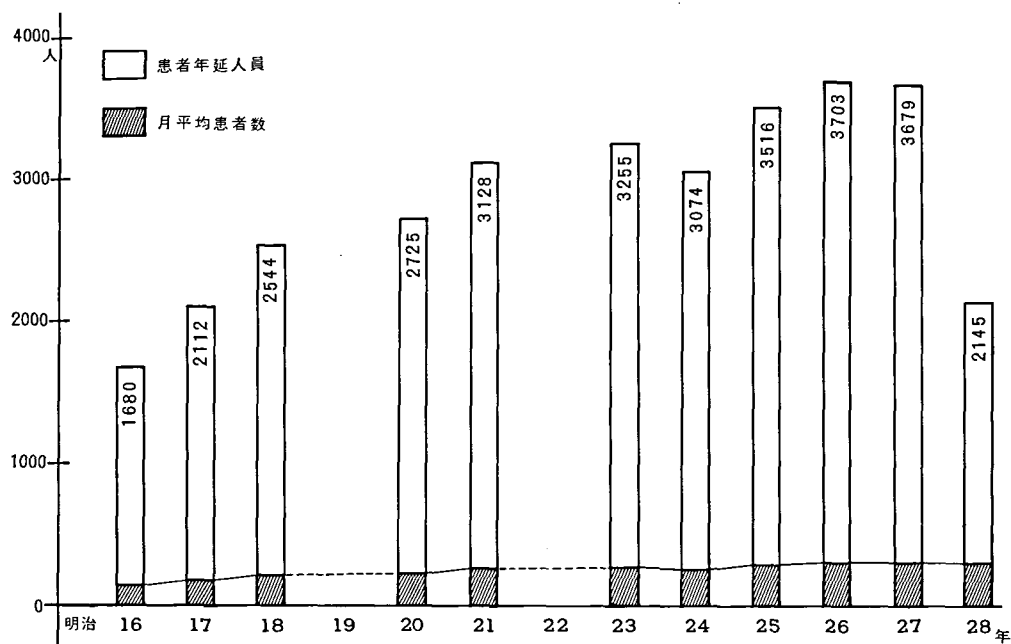


図2：明治時代一開業医の年度別患者数（明治16～28年）

三34才。パーキンスはペンシルバニアの出身で、ボストンの歯科大学を卒業し、相当の経験を積んだ後に日本へやって来た歯科医で、1874(明治7)年横浜にあったセント・ジョージ・エリオット St. G. Elliot の歯科診療所を譲り受けて開業した。パーキンスはエリオット時代からの名技工士松岡万蔵を起用して、西村輔三、渡辺晋三、堀内清頭、林 讓治、関川重吾、山田利充、黒田虎太郎ら後年日本の歯科医療を確立し先覚者となった人々を養成した(表7)。

晋三は明治12年5月、歯科医術修業試験に合格して、パーキンスのもとで研鑽を続けるうち、漢学を通じての知己で、後に西園寺公と共に京都立命館大学の創設者江馬天公からの激励の便りに依って、同輩の太田吉三郎と共に西洋歯科医術を初めて京都で開拓しようと計画し、同門の西村輔

表5：明治13年7月収納録より

歯科治療代金		
1 診療料	15 銭～30 銭	
2 止痛料	15 銭～20 銭	
3 抜歯料	10 銭～30 銭～60 銭	
4 根充填	50 銭	
5 ゴム充填	20 銭	
6 銀充填	小70 銭, 中1 円, 大1 円50 銭	
7 金充填	3 円	
8 掃除料	1 円	
9 義歯		
銀基義歯	6 円	6 円～18 円
義歯料	6 円	
入歯上顎16 枚	18 円	
入歯2 枚	14 円	
銀義歯4 枚	9 円	
10 菓子料	30 銭, 50 銭	

明治13年7月から12月までの収入

7月	19.80 円	18 人	2 日に1 人
8月	75.00 円	31 人	1 日に1 人～2 人
9月	215.35 円	48 人	1 日に1 人～2 人
10月	77.10 円	44 人	1 日に1 人～2 人
11月	103.25 円	29 人	1 日に1 人～2 人
12月	215.80 円	46 人	1 日に1 人～2 人

表6

	明治43年	昭和元年	昭和14年
貼 薬	1 歯 30 銭	30 銭～1 円	30 銭以上
アマルガム充填	1～3 円	1～3 円	2～5 円
ゴールドインレー	5～15 円	5～20 円	10 円以上
金 冠	8～15 円	8～20 円	15 円以上
ゴム床義歯	1 歯3～5 円	3～8 円	3 円以上

内規		
初診料	一席一回	金貳圓也
二處置料	乳牙歯	金貳拾錢以上
一抜歯	永久歯	金貳圓以上
一充填	セメント	金貳圓以上
一インレー	アマルガム	金貳圓以上
一白色合金冠	金合金	金拾圓以上
一金 冠	金合金	金拾圓以上
一ゴム床義歯	小臼歯歯	金拾圓以上
一鑲牙義歯	大臼歯歯	金拾圓以上
一鑲牙義歯	金六拾圓以上	金拾圓以上
一鑲牙義歯	金百拾圓以上	金拾圓以上
一鑲牙義歯	金四百圓以上	金拾圓以上

写真5

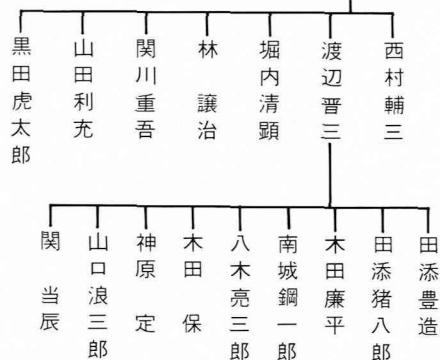
規定抄録		
一診療料	金貳圓以上	
一診察料	金貳圓以上	
一貼薬料	金貳圓以上	
一歯齒冠	金拾圓以上	
一金 冠	金拾圓以上	
一注射料	金拾圓以上	
一抜歯料	金拾圓以上	
一充填料	金拾圓以上	
一インレー	金拾圓以上	
一白色合金冠	金拾圓以上	
一金 冠	金拾圓以上	
一ゴム床義歯	金拾圓以上	
一鑲牙義歯	金拾圓以上	
一鑲牙義歯	金拾圓以上	
一鑲牙義歯	金拾圓以上	
一鑲牙義歯	金拾圓以上	

写真6

表7：明治時代初年の歯科医人派

明治時代の外人歯科医

ウィリアム・クラーク・イーストレーキ  
 ヘンリー・ウィン  
 セント・ジョージ・エリオット  
 ハラック・マーソン・パーキンス  
 アレキサンドル  
 ギュリッキ



三に相談を持ちかけた。西村は当時15才であったが、明治7年から3年間米国に留学し、渡辺晋三や太田吉三郎が歯科医術開業試験を受験する折には、パーキンスが書いた英文の修業証書に名を連ねて、西村の印を押す程、門下では重要な地位にあった様である。従って、京都で歯科医を開業するための器械や薬品、参考書などの選定には、渡辺晋三に大いに助言を与えたものと思われる。

渡辺晋三が京都へ行ったのは明治13年4月で、漢学者江馬天江の借家で開業した。京都では相当古い時代から医師の中の一分科として、口中医師或いは口歯科医師があって諸師の中に入れられており、前述した入歯師などは薬種屋などの次に記載される諸職の中に含まれていて、その両者の間には区別がされていた様である。その医師として登録され、歯科を専門とした渡辺晋三や太田吉三郎などは最初から近代的な口中医或いは口歯科医として高く評価されていたようである。

この渡辺晋三は近代的な西洋歯科医であって、気品高く人にこびず端然と自らの信念を貫く様な人であったらしく、寡黙で礼儀正しく謹厳で他に対してもまた厳しく、権門に対しての往診の際も、約束の時間に受診せず待たせたりすると「家には苦しんでいる患者が待っておりますので」と帰って来てしまったりした。これが又京都人の人気をあおった様である。祇園の名物男の幫間の蝶八も又渡辺晋三の勘気にあつた一人である。この蝶八は先斗町の古いお茶屋丸正の女将の紹介で患者になったが、最初初夏に訪れた時は羽織袴姿だったので問題がなかったのが、夏の暑くなってから甚平姿で診療室に通ったのを「蝶八さん、その服装はいかんよ」ととがめられ、それっきり奥へ引込まれてしまった。そのまま受診出来なかった蝶八は家に帰ると袴長袴に姿を改め、車で晋三宅へ再来「殿様、祇園の蝶八、心を改めて、再び参上つかまつりました」と大音声に呼びわり、畳に額を擦り付けてわびを入れ晋三の機嫌をとり直させたという事である。この逸話でも判る様に、歯科医渡辺晋三には、患者に対しても自らの要求を通すだけのプライドと矜持があったのである。

この渡辺晋三の生き方の根本は武士としての誇りであったと思われるが、歯科医道を自らの行動によって確立しようとする意図もあった様にも思える。それは診療報酬を一定とし、多くを納めよ

うとする者があっても固辞し、軽い治療や貧者に対しては無料とし、医人としての仁の道を正しく全うしていたのである。その大もとは何と言っても東洋的儒教の論理であるとは言うものの、多分に西洋の医の倫理からも影響されていた様で、ドイツの医哲学者フーヘランドの1836年刊診療便覧の「十二章医師の責務」(杉田玄白の孫にあたる成郷が邦訳した医戒と題する一文)に影響された所大の様である。

渡辺晋三はこのように京都における歯科医の鼻祖であるが、明治20年10月に歯科医術開業試験委員に任ぜられ、同40年3月京都府歯科医師会が創立されるや、選ばれて会長の任に就いた。42年8月癌腫を患い、12月11日早朝逝去した。享年66才、正六位であった。

以上渡辺晋三の略歴と人となりの概論を述べてみたが、渡辺の診療状態をその患者数からスポットを当てると、開業期間15年の間の平均値は一年を通算して患者数の最も少ない月は2月であった。11月、12月は患者数は少ないが、反対に収入の多い事が他の資料からわかった。

そして開業した年から15年の間に患者数は8.5倍となっている。これをみても渡辺晋三が如何に患者に信頼され、多くの人が来院を希望する様になったかがわかる。これがひとえに話術とか、ごまかしによるものではなく、彼の誠心誠意の診療の故であり、これこそ暴利を考えない仁の道に従った態度によるものであって、現代の歯科医がもって銘せなければならない所以でもあろう。これは多くの医療費を受けようとしぬ渡辺に対して菓子料という名目の謝礼を多くの患者が晋三に与えていた事でわかる。

当時の患者と医者との関係が、本当に相互理解に基づく、人情味のある間柄であったことは、過去の日本の或る一面の良さを思い知らされるものであり、医が仁術であった時代の良き見本である。

## 総 括

渡辺晋三の寄贈遺品から次の事柄が判った。

① 当時の記録の記載はすべて毛筆であるためにスレを生じ鮮明度を欠く部分がある。

② 診療報酬は10銭、1円単位であり、現在の保険診療の約2000分の1に相当すると思われる。

③ 明治初期の開業状況は、初年度年間患者数

432人、年間収入1413円と少な目であったが、年を経るに従って年々増加を示し15年後には8.5倍の伸び率を示している。

④ 患者の月平均を見ると2月の患者数が少なくなり徐々に上昇し5月に最高となり、月を追う毎に減少を示し年間を通じて11月、12月が最低を示した。しかし収入の面では逆に9月、11月、12月は多くなっている。

#### ま と め

日本の近代歯科医師の草分け的存在である渡辺晋三を通して、明治という特殊な時代の歯科医師像を追求すべく、氏の寄贈遺品の中から、その診療記録を分析してみた。

渡辺は診療報酬については一応の基準を自ら作り、すべての人が平等に、同じ割合で診療報酬を支払える様に考えた。

開業状況は、初年度は年間を通じて432人の患者を診、収入は1413円。これが年々増加の一途をたどって、15年後には8.5倍の伸び率を示している。このことは現在の様に糖質の消費も少なく、飽食でないから齲蝕の数も少なかったし、また一般的に民衆は貧しかったのであるが、歯科医の数が圧倒的に過少であったことが原因であったように思われる。2月の患者数の少ないことは現在でも日本の風潮としてやや残っているが、12月の患者の少ないということは現在の状態に当てはまらない。しかも患者の少ない割に収入の増えているという事などは、年末の特殊な診療内容の存在して

いたことを物語っている。

渡辺自身の明治の時代に於ける診療記録というものは患者数と収入面以外は殆ど皆無と言ってよい状態である。それに加えて渡辺晋三の読んでいたこの時代の歯科の文献が他に全く見当たらない事などが、詳細を解明し得ない原因になっており、非常に残念な事柄であった。だから唯これだけの資料だけでも得られたことは大層の喜びであった。他に資料を有する諸賢のご協力を仰ぐ次第である。

稿を終るにあたり本学に貴重な資料をご寄贈下さった、渡辺晋三先生の息子嫁糸子様、孫の脇屋和夫先生に心から謝意を表する。

#### 文 献

- 1) 井上 武(1966)現代日本医療史(開業医制の変遷)。頸草書房、東京。
- 2) 今田見信(1972)統歯学史料。医歯薬出版、東京。
- 3) 今田見信(1973)開国歯科医人伝(今田見信著作集)。医歯薬出版、東京。
- 4) 青島 攻(1973)歯科のあゆみ。ABC企画、東京。
- 5) 本間邦則(1973)歯学史概説。医歯薬出版、東京。
- 6) 正木 正(1975)新編歯科医学概論。医歯薬出版、東京。
- 7) 京極三朗(1977)上方歯科医人伝(その一)京都で最初の西洋歯科医 渡辺晋三伝。デンタルダイヤモンド、21:134-142。
- 8) 薬師寺敬祐(1980)作州勝山藩の歯科先覚者達。日歯医師会誌、33:637-640。
- 9) 橋口緯徳(1983)歯科衛生士概論。電算印刷、松本。